

立ち止まってみたら

榊田 正子

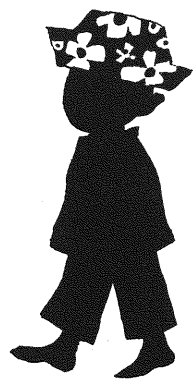
昨年の三月、私は保育の現場を退職した。在職中は立ち止まって周囲を見回すこともなく走り続けてしまったような生活だったので、退職の直後は、毎日定刻に出かけず、身近に子どもの歓声や足音の聞こえない生活に身の置き所の無い戸惑いを覚えたが、間もなく、走る時と立ち止まる時の両方を含めて私の人生が与えられているという、当たり前のことに気づくことができた。そして足を止めたこの一

年、今までは見えなかったことを垣間見たり、気づかなかつた視点に触れたりして、それらを味わいかみしめる豊かさを与えられたように思う。以下はそんなささやかな体験である。

それぞれの子育ての支援

この一年、色々な機会にたくさんの方の母親と子ども達に出会った。

伝い歩きを始めたMちゃんを抱えて、乳児の成長の様子も関わり方もわからず、誰かに聞くこともできず、不安と戸惑いの中にうずくまっていたAさん。同年代の子ども達と遊びたくて周囲のことに気を取られ食事や生活上のことがおろそかになりがちなY君を、許容できずに激しい叱責を繰り返してしまい、その自分にも苛立ってしまうBさん。またCさんは、小学生の二人の子どもを連れて新たな生活を組み立てていかねばならない苛酷な状況に疲れ果てていた。専門家のアドバイスを受け、ともかく自分を取り戻して生活のめどをつけるまでの少しの期間子ども達を施設で預かってもらうという一大決心をして、そのことを子ども達の通う小学校に報告に行ったところ、「そんなことをしたら子どもにとつてマイナス」と諭され、再び途方に暮れてしまった。みんな重い状況を背負いながら、子どもを抱えてギリギリの一日一日を過ごしている母親たちである。



ここ数年、「子育て支援」という言葉が社会的承認を得、行政的にもまた保育の実践の場でも様々な取り組みや方向性が打ち出されている。それは現代社会において確かに必要なことであろう。だが前述のAさんやBさんやCさんの様子を間近にし、その子ども達の遊び相手にもなったりする中で、私は、制度だけでは埋まらないそれぞれの子育て支援の必要性を痛感した。

支援というほど大きなことでなくても良いのかもしれない。時には「あらMちゃん、歯が生えてきたわね。少し固いものも食べられそうね」といったちよっとした一言や、共に生活する者同士の小さな

感覚の共有でも、そこに個別の温かい関係性を実感できるような行為であれば、意味を持つに違いない。「子育て支援」事業の推進で「子育て支援はこ」と足れり」とせず、まさにそれぞれの子育てにも思いを添わせていく姿勢を忘れてはならないと感じたのである。

保育を伝える

将来の保育者を目指している学生達に話をする機会にも恵まれた。できるだけ実践に即した理解と視点を得てほしいと願って事例を多用したが、そこで考えさせられたことがあった。

それは、実践を丁寧にわかりやすく表現した良い事例と思われるものを選んだつもりであったにもかかわらず、そこから現場の状況がなかなか伝わっていかないもどかしさを幾度となく感じたことである。仕方なくさらに細かい周辺の状況説明や解説を加えて、ようやく学生の表情に「ああ、そういう場

面なのか」といった微笑みが見られることになるのだが、どうもすっきりしない後味が残ることも多かった。

何故そうなったのかという点から言えば、精選したつもりであった事例も自分だけの思い込みであったのかもしれないし、また情報の受け手である学生側にも経験にばらつきがあったり、文字から状況をイメージする力が様でないということも考えられる。しかし何故なのかということよりも、情報の発信・表現方法という点で、私自身がこの実態から大きな課題を突きつけられた気がした。

実践の場にいる者として私は、子どもと保育者が創造していく保育の様相やその核心を、保護者や研究的立場にある人々と、また連携の必要性が増している保育所や小学校の人々と共有し、考え合っており、育ちつつある子ども達がより健やかに育つ環境を探していきたいと思っている。

この思いでこれまでも多少なりとも努力をして

きたつもりである。しかしその肝心な保育の核心は的確に伝わっているのだろうか。努力は的を突いていたのだろうか。保育を大切に思うがゆえに、それを表そうとする時に使う言葉や表現などにこだわりを持って、私自身は否めない。そういう自分自身を自覚しつつ、独り善がりにならないように保育を伝えるということを、課題として改めて考えてみたい。

卒園児の便りから

昨年の三月に卒園して小学校に進学した子ども達から、何通かの便りをもたらした。一通一通が在園時の姿を思い起こさせ新たな味わいをもたらす嬉しいものであったが、その中でH子の便りは特に印象に残った。

それは、小さなカードに三人の人間と小さな物がいくつか描いてあり、母親の添え書きに「先生にお手紙を書くと言ってこの絵を描きました。」S子

ちゃんとしてますだせんせいがか〜〜といて、わたしが〜〜をしているの」と今日の前のことのように詳しく説明してくれました」とあった。何故印象的であったかという点、H子が詳細に母親に説明したその状況―H子や一緒に居たS子と私とのやりとり、彼女が作って持っていた物の形や色など―を、実は私も鮮明に憶えており、H子の記憶とぴったり一致していたからである。

H子は三歳から三年間在園したが、その絵の場面は四歳一学期のことである。H子が画用紙に描いて切りぬいたクッキーを職員室にいた私に届けてくれることを何回も繰り返しという、どこでも見られる場面である。この時以外にも在園中に私とは色々な機会に関わりを持ち言葉を交わしていたのに、どうしてH子は二年も前のことになるこの場面をそんなに詳しく憶えているのだろうか。丁度その頃、長らく固定しているH子とS子の関係について、もう少し緩やかに開かれたものになることがH子とS子の

双方にとって良いだろうと担任が考えていることを知っていたので、クッキーを持って私の所に来た二人に、私は関わり方を考えながら「H子ちゃんには今度は〜」「S子ちゃんは〜」と対応した。そんな私の言葉をH子は大きな声を上げて嬉しそうに笑いながら聞き、S子と顔を見合わせていた。私自身は色々考えながらのやりとりだったので、その時の気持ちを含めてはつきりとした記憶があるのだが、特にここでH子と深く共感したというような印象は無い。

H子の心はその時どのように動いていたのだろうか。彼女にとってあの状況はどのような意味を持ったのだろうか。楽しかった幼稚園生活の思い出の一端まであるのだから、少なくとも何らかのプラスの意味合いがあるのだろうか……。

保育者はそれぞれの子どもの育ちがより充実したものであるようにと常に願いながら保育に臨む。子ども達はそういう保育者や仲間の子ども達と関わり支えられて生活を展開し、体験を積み重ねていく。

そこでの一つ一つの関わりが子どもにとってどういう意味を持ったのか、果たしてあのような対応で良かったのか、もつと違う関わり方があったのだろうか、という疑問を保育者はいつも持つてはいるが、よほど特徴的な展開が見られるでもなければ、すぐにその答えが出てくることはない。

それらはいつの間にかより大きな育ちの流れの中に溶け込んで、また新たな疑問に置き換わっていったりする。時にはH子の例のようにずっと後になつて不思議さを浮き立たせることもあるし、また、多分あの対応で良かったのだろうと微かな安堵をもたらず場合もある。

考えてみると、日々このような疑問を持ち続け、不思議さに出会えるということが、子どもの育ちを信頼しつつ保育に臨む保育者の姿勢を創り出し、子どもと生き生きと向き合う場合の支えとなっているように思われるのである。

(元お茶の水女子大学附属幼稚園)